

死んで気づいたらJtRに
成り代わるように言わ
れた(強制)

ハイクソリテイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

見切り発車のため続くかは不明。

処女作な上にゴミでクソな文章力だから期待しないように。

死んで気づいたらジャック・ザ・リッパーに成り代わるよう言われた（強制）
仕方ないから取り敢えず（できるだけ）ハッピーエンド目指す。

第1話

目次

1

第1話

——死んで、気づいたらジャック・ザ・リツパーに成り代わるように強制された。

決して巫山戯ている、という訳では無い。生前（今も生前と言えるのかもしいないが、兎に角1度死ぬ前）、二次元などにそれなりの造詣があった俺は、これが所謂、異世界転生、或いはそれに準ずる何かである、という事は何となく察することが出来た。目が覚めて、前のままの容姿であつたのなら、1度死んだ、というのがまやかしだったのでろうと俺は解釈したのであるが、生憎、今の俺はジャック・ザ・リツパーの容姿そのものである。

このような事態に陥る前、俺は神様（本人談）からジャック・ザ・リツパーに成り代わって生きるよう言われたのだ。：曰く、「間違つて君のこと殺しちゃったから許して。取り敢えずジャック・ザ・リツパー（F a t e）にしてあげるから自由に生きなよ。それからお詫びに気配遮断EXにしておくね」ということらしい。

——ナンダソレアリキタリスギンヨフザケンナ——

加えて、ジャック・ザ・リツパー^殺？ F a t e世界？ 人生ハードモードですなありがとうございます
うございます!!

ここまで来てしまった手前、多少相好を崩すことにするとしようか。

てゆーかこれ誰に向かつて喋説明してってんだこれ（白目）

あれか？読者さんにか？（白目）

まあ何はともあれ、ジャック・ザ・リツパーとして自由に生きろとのお達しである。ただなあ：自由に生きろ、と言われても具体的にどうするのか：そもそも俺のジャック・ザ・リツパーの印象っておかあさんおかあさん言いながら毒霧出して聖母マリアザリツパー解体するしかないんだけど。

これもうわっかんねえなあって

ジャック・ザ・リツパーになつた手前どんなことが出来るのかとか一応は把握してるが。

以前30代のオッサンがいきなりジャック・ザ・リツパー幼になれつていわれてもね…これはあれか？同性愛者見になれと申すか？（尚これ以上余り成長しない模様）

しかも平気で人を殺せると来た。それ言つたらそもそもFate世界で生き抜くなんて出来ないんだけども。

取り敢えず人殺しとかせず、安穩に生きるしかないかね…

ところでここ、神様（自称）と相對してた空間とあんまり変わらないんだけど、これ以上何も無いよね？よね？

アビヤツ（何らかの力によって引きずられた声）

東京某所にて、一人の男が何やら神妙な面持ちで佇んでいる。

脇に、意識のない女性を抱えて。

何を隠そう、彼は、今回ルーマニアの地にて起こる聖杯大戦に、黒の陣営のマスターとして参戦する手筈となっている。

とある殺人鬼が使用していたと言われるナイフを女の首に突き立て、男は、詠唱する。告げる。

「ふー、…」

息を飲み――

「――素に銀と鉄、礎に石と契約の大公」

「――手向ける色は、黒」

「――降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「――告げる」

「――汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。」

「――聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「――誓いを此処に」

「——我は常世総ての善と成る者」

「——我は常世総ての悪を敷く者」

「——汝三大の言霊を纏う七天」

「——抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

男の名は、相良豹馬と言った。

人殺しとかせずに安穩に生きようとしたら既に死んでいた件について。

——アアンマアリダアアアアア——

どう伝わってるかは知らんけどこれはもう人殺し認定されてますね（諦め）

この考えに至った今の現状——

目の前に令呪あつこ持れつた人間英霊がいます。

これである。

死さしんだヤツは生き返めらないエドワード・エルリック（キラッ）

てか、ふざけんなバーロー

んで、周りには俺と、ソイツと召喚者…後一人、血まみれの女性…アレコノ人ドツカデミタ

コトアルナー Apocrypha の黒のアサシンのマスター（魔術師にあらず）ダツタ
キガスルナー

…でも、英霊召喚だとして、どう考えても喚ばれたの俺だよ、だってジャック・ザ・
リッパーナ訳だし（六導なんたらさんはガン無視）

取り敢えず名乗りを――

「サーヴァント、アサシン。召喚有無を言えずに従い参上したよ？」

「よろしく、わたしたちのマスター？」
おかあ…いや、おとわさん